



「見たり、聞いたり、探ったり」No.239

通算 No.391

青 木 行 雄

新国立競技場・堂々・完成オープン
(令和元年11月30日)

東京都の新宿区と渋谷区にまたがり、明治神宮外苑に隣接する場所。2016年(平成28年)12月11日に着工し、2019年(令和元年)11月に完成した日本一の見事な国立競技場は建築面積約6万9,600平方メートル、観客席は約6万席をうわまわる。

本競技場は文部科学省所管の独立行政法人で日本スポーツ振興センター(JSC)が運営主体で、施設所有権を持っている。

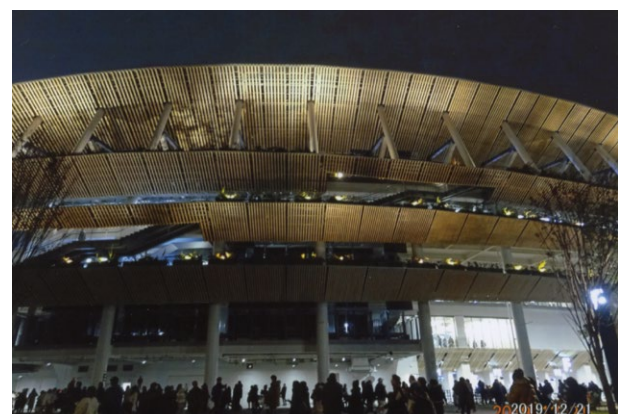
本競技場は、2019年(令和元年)12月15日(日)に施設の竣工式を開場式(オープニングイベント)を21日(土)に開催、日本スポーツ振興センターより、開場後の名称は『国立競技場』となることが発表された。

国立競技場はいつ、どのように建設され、どのような歴史を辿^{たど}ってきたのか、その歴史は大正時代まで遡^{さかのぼ}るのである。

国立競技場の前身は「明治神宮外苑競技場」(以下神宮競技場)であり、日本で初めての、そして東洋一の本格的陸上競技場として、青山練兵場跡地に建設された。この競技場は、1919年(大正8年)12月に工事が着工されたがその後、物価の高騰や関東大震災の被災者の収容施設になるなどで工事が中断され、1924年(大正13年)3月ようやく工事が再開され、同年10月に完成したという。この競技場は、陸上競技のみならず、サッカー、ラグビーなども行われ、総合競技場として利用された。

第2次世界大戦中に学徒出陣の壮行会が行なわれたり、敗戦後は連合軍に接収され、「ナイルキニック・スタジアム」と名をかえて使用されたりと、暗い時代もあったのである。

敗戦から数年後、日本は「平和な日本の姿をオリンピックで世界へ示したい」として、オリンピック招致の声明を出した。そのための国際的なアピールとして、1958年(昭和33年)、「第3回アジア競技



ドームの外観と外庇を写す



昭和39年に行なわれた東京オリンピックの聖火ランナー



旧国立競技場の聖火台
新国立の聖火台は移動式にして中に作るようである

大会」を東京で開催した。そのメイン会場として生まれ変わったのが旧国立競技場であった。

国際大会の舞台となる競技場の建設は、神宮競技場、今回のように取り壊しから始まった。建設計画の中心人物は、建設省関東地方建設局(当時)の角田栄氏と設計・デザインの片山光生氏。着工は1957年(昭和32年)1月で、大会を2か月後に控えた1958年(昭和33年)、ついに完成したのである。

そのアジア大会が成功裡に終了し、東京オリンピックの招致も実現すると、国立競技場は、まさしく日本を代表する国際的競技施設という存在を国内外にアピールしていくことになったのである。

そして、東京オリンピックを2年後に控えた1962年(昭和37年)3月、競技場の拡張工事が開始された。主な内容は、収容人員増のためのバックスタンドの増設、正面スタンドから見て右側にあった聖火台のバックスタンドを中央へ移設、グラウンド地下道の新設、電光掲示板や夜間照明設備の改修などであった。

そして1964年(昭和39年)10月10日から24日までの15日間、94か国が参加した「第18回オリンピック競技大会・東京大会」が盛大に開催され、改装された国立競技場では、開・閉会式及び陸上競技、サッカー決勝と3決定戦、馬術の大賞典障害飛越が行われたと記録にのこされている。

私がこの木材業界に入社し、縁あって、この国立競技場の拡張工事の木材資材納入にかかわった事を今でも覚えている。当時まだ仮設材はコンパネがなく型枠には杉板、北海道のエゾ板の相ジャクリが多量に使われていた。特に苦労したのが、94か国参加の国連旗の旗(ポール)、長い棒を木材で使用する事になり、8m~10m長丸太を1,000本程用意して、数百本程必要の為に1本1本ころころがしては検査を受けた苦い経験があるが、あの競技場の周りの風に棚引く国旗を見るたびに当時の事を思い出したものである。

建替の検討

2008年(平成20年)5月29日、文部科学省は、旧国立競技場の施設老朽化などを理由に、球技場への転換も含めた「調査研究協力者会議」を設置した。当時すでに行われていた2016年(平成28年)夏季オリンピックの東京招致活動では、晴海埠頭(東京都中央区)に新たに東京オリンピックスタジアムを建設してメイン会場とし、旧国立はサッカーなどの会場に用いる計画もあったようだ。しかし、このときの招致活動は2009年(平成21年)10月の第121次IOC総会でリオデジャネイロの開催に決定したためこの案は中止となった。

その後、2011年(平成23年)7月16日、東京都は、2020年夏季オリンピック開催地として立候補することを発表した。

そして翌2012年(平成24年)、「8万人規模を軸に検討」「全天候型ドーム構想を視野に」との全面建替工事、(施設の老朽化対策もあり)構想が発表された。これには「レガシー」(未来への遺産)というコンセプトも使われている。

そして2012年(平成24年)、「新国立競技場基本構想国際デザインコンクール」を実施を決定し、同年7月21日、新聞見開き全面広告を出した。「完成は2018年度」と記載された。

そして同年7月20日から9月25日までの募集期間の応募総数は計46件(海外34・国内12)あり、一次審査で11件(海外7・国内4)に絞られ、最終的に17番のイギリスのザハ・ハディドの作品が最優秀賞に決定した。

それから、2013年(平成25年)9月8日東京(56年ぶり2度目)が2020年夏オリンピックの開催地に選ばれ、新国立競技場も大会のメイン会場として決定した。あのテレビでの開催決定は大変印象にのこるシーンであった。

その後、有識者会議等試行錯誤の検討、2015年(平成27年)7月17日、安倍晋三首相が、先の「ザハ案」を白紙にし、予定していたラグビーW杯(2019年9月)の新国立での開催断念を表明したのである。

そしてその後、再コンペに2案が応募 2015年(平成27年)12月22日、大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体によるA案が決定、翌2016年(平成28年)1月29日契約し、設計が開始された。
A案決定の時・紙面を見ると。

2015年(平成27年)12月22日、日経夕刊一面トップに「新国立A案に決定」と出た。

その時の紙面をちょっと記してみたい。

2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場の整備計画で、政府は22日、設計・施工の公募に応じた2陣営の「A案」「B案」のうち、大成建設などのグループの「A案」が選定されたことを明らかにした。デザインは建築家の隈研吾氏が手掛けた。旧計画の白紙撤回から約5ヶ月を経て、宙に浮いていた競技場建設が再び動き出したのである。

事業主体の日本スポーツ振興センター(JSC)の大東和美理事長が審査委員会の審査結果などを踏まえて優先交渉権者とする陣営を決定し、同日の政府の関係閣僚会議(議長・遠藤利明五輪相)で了承を得た。

安倍晋三首相は会議で「基本理念、工期やコストなどを満たす素晴らしい案だ。次世代に誇れるレガシー(遺産)にする」と表明した。

遠藤五輪相は記者会見で、「アスリート第一、世界最高のユニバーサルデザイン、日本らしさなどで素晴らしい案が選ばれた」と述べている。

大成建設は決定を受けた22日、「極めて重要な国家プロジェクトの優先交渉権者に選定されたことは光栄の至りです。その責任の重さを十分認識し、国民の皆様に喜んでいただけるスタジアム建設に精一杯取り組みます」とのコメントを出している。

余談だが、この日大成建設の株は前日比4%（35円）上って841円をつけていた。

大成建設などの「A案」の概要

整備費 1,489億円

階数 地上5階・地下2階（高さ49.2m）

総面積 19万平方m

観客席 6万8千席→五輪後8万席に

デザインテーマ 木と緑のスタジアム

デザインの特徴 鉄骨と木材を組み合わせた屋根

周辺の木々と調和する軒ひさし

施工会社 大成建設

デザイン 隈研吾氏

完成予定 2019年11月末

そして、2016年（平成28年）12月、着工したのである、工期3年（36ヶ月間）

幾多の難関を乗り越えて、36ヶ月間工期工程通りに完成した競技場の様子をちょっと触れてみると、

もっとも多い時で1日5,000人もの作業員が従事し、毎日の朝礼や作業工程に細心の気をつかい、千社にもおよぶ業者が優秀な作業員を送りこみ、一人一人が日本一の現場で、歴史に残る仕事をしているんだと言う誇りを持って働いていたし、土方、左官、大工、警備のガードマンまでも口に出して誇らしく答えていた。

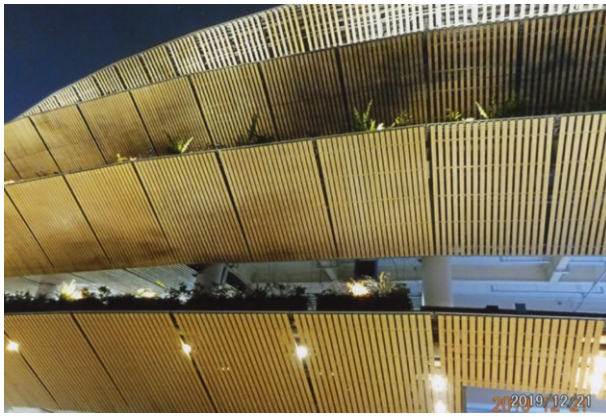
こんなことから、工程に1日の遅れもなく完成したと自信を持って言える現場環境であったのである。

そして、2019年11月30日、各紙一面に新国立競技場完成が発表された。

そして2019年12月15日竣工式が開かれた。ある新聞の見出しに「歴史を刻む五輪の夢舞台」と書かれていた。

「2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる国立競技場（東京・新宿）で15日、竣工式が開かれた。当初計画の白紙撤回を経て、36か月という短期間の工期で建設された。スポーツの新しい『聖地』は、半世紀ぶりに東京で催されるシンボルともなり、世界のアスリートたちの歴史やドラマを刻む。」

完成を祝う式典に出席した安倍晋三首相は「新しい時代、令和元年に完成したスポーツの新しい拠点が、



外底、360° 木材が使われている

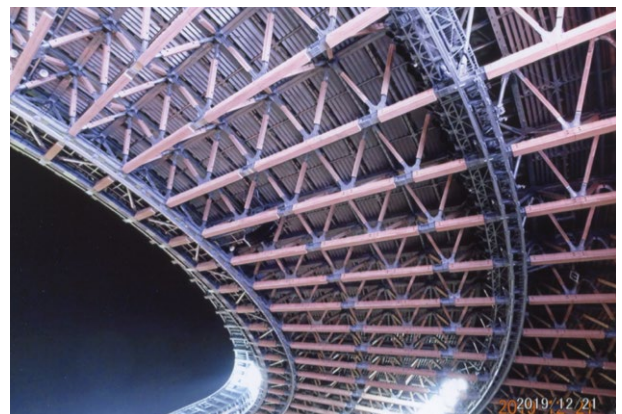


ドームの中から全体の木組を写す

これからの歴史を刻んでいくことを心より祈念する」と語った。

小池百合子都知事は「世界の皆様をおもてなしの心で迎え、素晴らしい記憶と記録に残る大会になるよう準備を進めたい」と話した。

観客席はすり鉢状の3層スタンドの構造で、低層の席からは選手を間近に見ることが出来る。五輪の際に約6万席、パラリンピックでは約5万8千席に上る見通しで座席に木漏れ日を意識して白や黄緑などの5色をモザイク状に配置したということである。



ドームの中から、木組を写す。全体で木材2,000㎡が使われたという

難関の屋根工事について、大成建設所長の話を書面で見かけたので記してみたい。

国立競技場の屋根の工事などで活用されたのが、可能な限り部材を事前に組んだり制作したりして作業効率を上げる工法にした。

屋根のほぼ全体を256のユニットに細分化し、地上で1つずつ制作、鉄骨を組んで木材や照明器具なども取り付け、できあがったものをクレーンでつり上げて接合していった。

設備材も含め事前に付けておくことで、つり上げ回数や取り付け時の作業を減らして時間を短縮した。高所での作業を減らし作業員の安全に配慮する狙いもあったという。

また日刊木材新聞にも「新国立競技場が竣工」の記事に、「日本スポーツ振興センターが整備してきた新国立競技場が11月30日に竣工した。全体で2,000立方メートルの木材を屋根・軒庇・情報の庭等を使用した。屋根は長さ60m、重さ2万トンの規模で、鉄骨と木材を組み合わせたハイブリッド構造を採用している。森林認証を取得した国産材を積極的に活用し、下弦材にはカラ松、杉をラチス材として使用した。軒庇には47都道府県から調達した森林認証材の杉と、沖縄県からはリュウキュウ松を使用した、1県当たり1.5～3立方メートル、軒庇全体で145立方メートルを使用した」、等の記事が掲載されていた。

大成建設グループによる新国立競技場は2016年(平成28年)12月11日着工して、3年間(36ヶ月)、延べ約150万人の作業員を投入し、関連工事なども含む整備費1,569億円になったようである。資材費や人件費の上昇などの影響は受けたというが、15年に設定された整備費の上限、1,590億円は下回ったという。

そして2019年11月30日、工期通りにすばらしい競技場は完成した。

日本一、いや世界一のスポーツの「聖地」として誕生したと思われる。

2019年12月15日に竣工式が行なわれ、安倍首相、橋本五輪相、小池百合子都知事他が出席し、日本を代表する新たなスタジアムの完成を祝った。そして、12月21日(土)に「オープニングイベント」が盛大におこなわれたのである。

筆者も参加したので21日の様子を次号に記載したいと思う。

参考資料

日経新聞

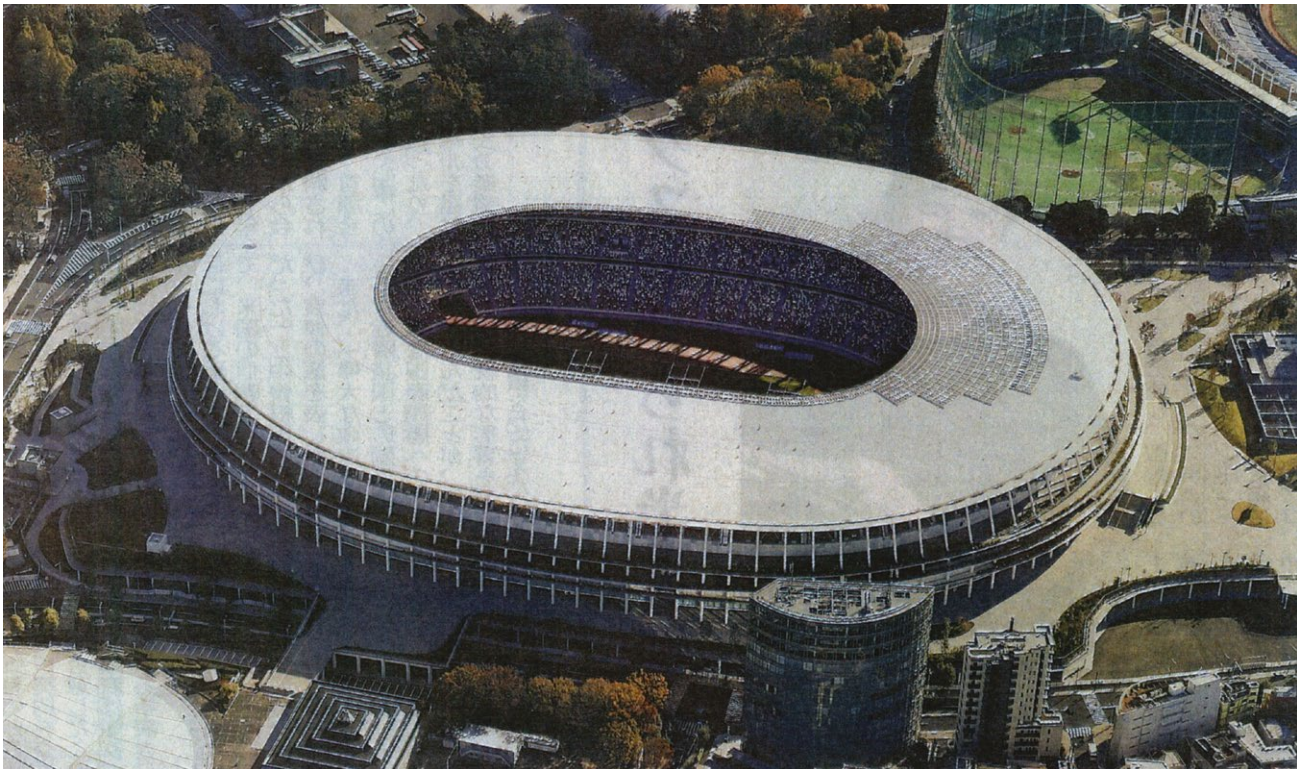
読売新聞

朝日新聞

日刊木材新聞

大成建設の資料

令和2年1月5日記



新国立競技場 読売新聞 2019年11月



旧国立競技場 読売新聞 2014年5月